研究ノート

『安政箇労痢流行記』にみる伝染病体験

宮　前　健太郎

Abstract

During the Bunsei period of the Edo era, the threat of cholera arrived in Japan causing unprecedented fear and confusion. The spread of cholera by Dutch merchant ships led to numerous deaths of individuals in big cities, such as Edo, Osaka, and Kyoto, owing to the dense population and active traffic in urban areas. Thus, this study aims to decipher the recorded contents of "Popularity," the resultant experience of the cholera disaster during the Edo period.

At the time, various phenomena, such as sudden death among patients suffering from cholera and severe dehydration, have been interpreted in connection with the belief in Inari. Later, in the Meiji era, rumors of cholera, folklores, and the humanoid criminal image, as well as the conspiracy-theoretic narratives that accompanied them, were compared to the popular cholera in the Edo and Meiji eras. As such, the difference in understanding became clearer. In other words, the understanding of infectious diseases at a given time reflects the degree of intervention from the national government.

1．研究背景

江戸時代文政期、コレラという脅威が日本に渡来し未曾有の恐怖と混乱をもたらした。都市部への人口密集と交通の活発化が仇となり、オランダ商船から伝播したコレラは江戸、大阪、京都など各地の大都市を襲い数万の死者を出している。後年、北里柴三郎が説いているようにこの病気は在来の日本には存在せず、船舶などによる交易で朝鮮・ジャワ方面[i]から侵入したと言われている。現代においてこそ伝染病の蔓延時にはワクチンの接種、患者隔離、都市封鎖など多くの対策がとられる。だが細菌学をはじめあらゆることが未発達であった近世（江戸期）の社会では、極めて原始的な抑制策に頼らなければいけない事情があった。あるいは、集会形式で行われる加持祈祷のようにかえって感染を広げてしまう場合も珍しくはなかった。

既存の衛生研究においてコレラが検討される場合、最も時期区分として言及されやすいのはおそらく明治初頭である。背景としては内務省衛生局の設立以降、隔離行政、衛生知識の啓発、一揆取り締まりなど種々の動きが顕在化したことが大きい。ただし逆に捉えれば、江戸文政期に初めて流行した事実がありながらも、江戸期におけるコレラ病体験やその明治期に対する連続・断絶については研究が比較的手薄であったようにも思える。

『安政箇労痢流行記』（以下、「流行記」）は、江戸時代安政期におけるコレラ流行を聞き書き[ii]の形で記録している貴重な資料である。江戸期には藩による医療統計などがほぼ整備されておらず、当時の伝染病をめぐる混乱や実体験に迫ることは非常に困難であった。本研究の目的は『流行記』の解読を通して、江戸期におけるコレラ流言に宿っていた世界観やその背景を推察することである。

上記の研究目的を遂行するために、大きく三つのプロセスを設けた。まず、『流行記』の内容を解読し、そこに含まれる流言、すなわちうわさ話の記録が社会学における既存研究の視座からどのように位置づけられるのかを探っていく。その際、近世日本社会において病と深い関わりを持って捉えられていた「憑依現象」には特に注意を払う。次に江戸期以降、具体的には明治期におけるコレラ体験との対比を通して、両者の共通項や差異を捉える。最後に上記二つを踏まえ、『流行記』の内容が持つ社会学的な示唆を考察する。

2．先行研究/分析対象資料

2.1　病とその意味づけに関する研究

さて、本研究で照準するコレラ流言とは、換言すれば感染や患者の死をめぐる、場当たり的な意味づけ・解釈である。例えば近世、江戸期の日本社会では伝染病をめぐって「憑依」という意味づけがよく用いられていた。具体例については分析の章に譲り、本節ではそれを読み解くための視座を付置してみたい。

「病と実存」という領域に対し画期的な考察を行った人物として、Foucault（1954＝1970：訳 77−78）が存在する。彼は精神疾患をめぐる論考の中で、患者の不安こそが病の中枢であることを指摘している。不安は個人の生活史の中心に根差し、その有為転変を通してユニークな意味づけを導くのである。ただし、不安とそれによる意味づけ、という現象を理解したいのであれば、自然科学、実証的分析、機械論的因果律といった分析の諸視座からは距離を置かなければいけない。患者自身の直観[iii]を尊重し、彼らの眼から病の根本的体験を復元する営為を通して、初めて体験の理解が可能になるのだ。

もちろん Foucault が上記の整理をおこなったのは、精神病というカテゴリに対してであり、無批判に本研究に援用することは避けなければいけない。とはいえ、近世、初めて日本で流行したコレラがかつてない不安と恐怖をもたらしたのも、ある程度は事実だ。その中でコレラに関わりのあった人々が行った意味づけ・

解釈について理解したいのであれば、上記の視座は自然と必要性を帯びてくる。ただし、『流行記』に記録されているコレラ流言は、全てが憑依現象を介在させているわけではないため、分析を前半・後半に二分割し、前半では憑依に関する事例、後半では憑依が介在しない事例を分析していくこととする。

2.2　病気観・身体観をめぐる研究

次に、近世日本における病気観・身体観について扱っている先行研究を検討する。対象とするのは立川（1976)、昼田（1985）の二つである。コレラ禍に関する流言記録を読み解くにあたり、彼らが示した視座・知見は非常に有益である。加えて『流行記』の記録を解読することで、上記二つの研究の不足部分を補うことも期待される。

まず立川（1976）について述べる。彼の病気観整理は単なる歴史叙述を超え、「現代において過剰な管理の対象になっている死生観を文化の文脈に投げ返す」という大きな今日的背景によっているという点でも意義がある。

立川の研究の一部をなしているのは、平安期から江戸期まで伝承されてきた病に対する、民間伝承の文化である。現代においてこそ疾病は医学によって「征服」の対象となったが、伝統社会における「祓い」の文脈を対比の対象として据える手法がとられている。ここで重要なのは、彼が病に対する民間伝承を非科学として断ずる立場を取らず、むしろそこに宿る見えにくい効能を析出していることである。

次に昼田（1985）を挙げることができる。彼は東北の寒村における記録文書を整理し、近世の住民たちにとって病気がいかなる存在として共存してきたかを叙述している。立川と同じく、昼田による研究も「病気とは何か」という現代に暮らす人々にとっての根源的な問いに迫っている。

昼田による原著のタイトルには、「狐憑き」という言葉が入っている。すなわち、近世世界における病気の理解に「憑依」の現象あるいはそれをめぐる文化が深く関わっていたということだ。彼の研究の優れた点は、憑依現象と病をめぐる文化を読み解く上で有益な分析モデルを提示していることにある。アニミズムの流れをくむ憑依現象は、①何が憑くか、②いかなる形で憑くか、③なぜ憑くかという三つの視座で捉えられる必要があるのだ。

さて、上記の二研究は成果・フレームワークの部分で適宜援用していくが、分析を行うにあたりその不足している側面にも言及しておきたい。

まず立川（1976）についてであるが、「病気観」を記述する上で対処や治癒に至るプロセスを捉えている一方、反対側に存在する「罹患」の内実が十分には検討されていないことが挙げられる。彼の研究の主眼は近世に見られた土俗信仰、祈願・祈祷の効能を探っていくことにあったゆえ、前者に重点が置かれることはやむを得ないとも言える。筆者が目指すのは江戸期において広く問題化したコレラ禍を例として、立川の研究で欠落していた対照部分を補うことにある。

次に昼田（1985）であるが、彼が憑依現象と精神病の関係を、患者が置かれる差別的な待遇に至るまで丁寧に叙述しつつも、その関係を重視するあまり同時代における他の疾患が分析の範疇から外れてしまっていることがある。詳しくは以降で見ていくが、江戸期における「憑きもの」と乱心（精神病）が強く関連づけられていた昼田の指摘は妥当であるとしても、コレラのような悪疫（伝染病）と憑依現象が一定の関わりを持って捉えられてきたプロセスも全く見られない訳ではない。こういった欠如部分を念頭に置きつつ、以降では『流行記』の記録を整理してみたい。

2.3　『安政箇労痢流行記』について

分析の章に入る前に、『流行記』の資料としての性質を整理しておきたい。『流行記』は安政５年９月、コレラ流行の中で戯作者の仮名垣魯文によって刊行された。著者の魯文であるが、江戸期から明治期にかけて『安愚楽鍋』などの著作で高い評価を得た人物である。特に安政２年の大地震の際には被害や混乱の様子を『安政見聞誌』として編纂発表するなど、災害ジャーナリストとしての活躍も多く見られた。

『流行記』は魯文による、一連の活動の中で著された文書であるが、大まかな内容としては江戸のコレラ被害、軍医ポンペによるコレラ対処、当時発行された御触書など多様な情報が含まれている。ただし、うわさ話の研究という本論文の主眼から鑑みた場合、上記の内容の優先度合いは相対的に低くなる。むしろ重要なのは、医学史や公衆衛生史などで軽視されがちであった世間話、怪異や俗信にまつわる記録の集合である。幽霊や疫病神、憑依、まじないといった諸現象の中で当事者たちがどのような体験をしてきたかを精査することで、初めて資料の内容を流言研究の文脈に引き寄せることが可能になる。

先に述べたように江戸期は自治体や行政組織によるパンデミック現象への、公的介入が極めて希薄であり、それに伴い伝染病をめぐる体験の実像が記録されることも非常に珍しかった。『流行記』の内容を読み解くことは単なる歴史叙述のみならず、その後の伝染病現象の趨勢や対処のあり方、社会的位置づけを相対化していく一助ともなるだろう。

３．分析

分析を行うにあたり、『流行記』に書き残されていた記録の現代語訳を以下で挙げていく。なお引用にあたり原文が長すぎる場合は文意を改変しない範囲で要約を行なった。まず狐や狸といった動物の憑依現象をめぐる記録を解読する。

3.1　憑依現象をめぐる『流行記』の内容

「８月18日◯◯町の住人が異様な病状を示したので、同じ長屋に住む者たち

が病人を囲んで『さては野狐ではないか』と問い詰めると、『私は京都からやってきた鉄炮洲稲荷神社への遣いである。今後、野狐に取り憑かれたくないなら八狐三郎左衛門と張り紙に書き、門戸に貼るとよい』と言った。語り終えると病人は駆け出し、△△町にある稲荷神社拝殿で『お頼み申す』と声をあげて卒倒した。人々が意識を失った病人を連れ帰ると、病は全快したという。」

「或る大諸侯の話である。家の中に恐ろしい外見の化け物が現れたので刀を持って追い払った。生け捕りにして、夜だったので顔を照らしてみると歳をとった狸だった。この化け狸は奇病の流行を利用して、人々をたぶらかして、虚をついて苦しめているという。」

「××町に流行病の患者を数多く救った町医者がいた。ある夜、この町医者の体に鼠が入り込み、妻が助けようとしたが体内を無尽に動き回られて息絶えた。この町では他にも鼠に侵入された住人の例があるが、中には助かった者もいる。もし体に入ってしまった時は膨らんだ部分に刃を当て『出ていかなければこうしてやるぞ』と責めれば追い払うことができる。あるいは患部から黒気が立ち上り、光を放って散っていった様子が見られたなどと、不思議なことの数々である。」

「八月中旬、佃島の漁師に野狐が取り憑いた。危険を感じた近所の人々が神官や修験者を呼びあれこれ責め立てると狐はその者の体から出ていった。野狐は住人たちによって退治され、亡骸は焼き捨てられた。その後地元の有力者のはからいで、狐は大明神として祀られているという。」

ここで昼田による憑依現象の解釈枠組みを、一度援用してみたい。第一に「何が憑くのか」という論点についてだ。『流行記』に見られる記録の中で人々に取り憑きコレラを起こしている神・霊は狐や狸、ネズミなど動物の表象で現れることが多い[iv]。脱水や下痢によって多数の死者が出る様子を、当時の人々は野生動物の憑依現象として解釈していた。ただし先にも述べたように、本研究において主眼となるのは解釈・意味づけの自然科学的な妥当性ではない。あくまでも患者たちの直観を分析の基盤にしつつ、その背景を推察していかなければいけない。

そこでうわさ話の記録を追っていくわけであるが、『流行記』の内容は彼らの体験のみならず、その社会的背景をも可視化してくれる。とはいえ江戸期という単一の時期区分の中で理解するだけでは幾分わかりづらいため、その後のコレラ流行で見られた記録の趨勢ともよく対比していく必要があるだろう。

Shibutani（1966＝1985：訳34）で示されていた流言とは、次のようなものだ。曖昧な状況に落ちいった人々が断片としての知識を寄せ集めることによって、そ

の対象に有意味な解釈を与えようとする一種のコミュニケーションが、うわさ話として生起するのである。彼は第二次大戦における社会不安・緊張を例に考察を行っているが、これは伝染病の蔓延という危機的状況の中にもよく当てはまる。伝染病としてのコレラは「青い恐怖」の異名をとるほどに人々に恐れられた記録がある。欧州やアジアを問わず、急激な脱水症状、下痢や嘔吐によって肉体が干からび、萎縮して死に至る病状は当該時期の住人たちにパニックに等しい状態をもたらしてきた。江戸期、コレラに直面した人々はかつてない恐怖の中で、疫病の原因や対処の方法を探り自らの身を守ろうと試みたのだ。『流行記』に見られる憑依現象の記録は、彼らが思案した防衛策の、あり方の一つを例示している。

ただし、江戸期以降、たとえば明治期に見られるコレラ流言と『流行記』の内容にはいくつかの差異が見られる。明治期においてもコレラ流行は深刻な社会危機となり、10万人を超える死者を2回にわたり出している。コレラ流行の副次的な危機として立ち現れたのが、いわゆるコレラ一揆である。コレラ一揆とは患者の搬送や病院への隔離、消毒剤の散布に抗議した地域住民たちが、集団で警察官や医師を襲った事件である。その際に流布した流言とは概して「隔離されると医師に殺される」、「警察官はコレラの元になる毒を撒いている」[v]といった内容であった。上で見てきた流言記録とは、同じコレラ禍を軸としつつも大きく異なる世界観を有していることがわかる。

一度整理すると、江戸期・明治期という二つの時間軸には、共通する部分が意外にも多かった。コレラ流行によって多くの死者が出たこと、患者や感染拡大の惨状を理解するための科学的知見が未発達であったこと、それによってうわさ話のコミュニケーションが増殖し記録されてきたこと、などである。ところが記録されているうわさ話の世界観は、いくつかの部分で大きく異なっていた。前者は霊が憑く[vi]ことによって人が亡くなると解釈し、後者は医師や警察官によって人が殺傷されると解釈するのである。コレラの解決法も、全体としてではないが異なる。前者は狐を除けるための札を貼ることによって予防しようと試みるが、後者は医師たちを襲うことで患者を救おうともするのだ。『流行記』に見られるうわさ話の世界観は、病気[vii]、死、災害といった諸現象に対する、人為的介入の希薄さを示しているといえよう。

3.2　憑依現象が介在していない『流行記』の内容

次に、憑依現象が介在しない流言記録を見ていく。数は少ないが、『流行記』にはいくつかの事例が存在する。

> 「高田馬場に住んでいたある人の話である。時は五月ごろ、夕暮れに枕元に座っている誰かが次のように言ってきた。『私は厄神の王である。四、五日ほど宿を貸して欲しい』。一度は断ったが『迷惑はかけない』というので小部屋に案内してあげた。すると『お礼にこれをあげよう。』と挿絵のような

端書きを差し出した。『これを家の門戸に貼っておけば、我が一族は家に入らない。さらに病にかかった人がいれば、この札を撫でて床下に置いておけば死を免れる。』と言い残して、大勢の老若男女とともに小部屋に入っていった。」

「桶屋の娘が病に侵されて嘔吐が激しく、死にそうな様子であった。診察に来た町医者は『生き延びることは難しい。だが気休めの薬を処方しよう』と言っていたが、薬を調合しているうちに娘は息絶えてしまった。医者はこのような様子なので仕方なく家に戻ったが、突如腹痛に襲われ妻や近所の人たちの介抱もむなしく死んでしまった。この頃先に出てきた桶屋の娘は納棺される所であったが、呆然とした様子で生き返ったので両親たちは驚きながら喜んだ。不要になった棺は急死した医者を納棺するために使われて、何かの因果があるように思えた。」

憑依現象が介在しない流言の事例では、先に見たような狐状の神などは登場しない。代わりに人語を話す人型の「厄神」が現れ、病気から身を守るための呪符を渡すなどしている。あるいは憑依の媒介項となる「神」の存在そのものが省略され、人間の間にある生死の因果として解釈される事例も見られる。

先に参照した昼田による、「憑きもの」の視座をここで援用するのは難しいが、当時における住民たちの不安や、それに基づく疾病観を理解するには有益な記録であると言える。消毒や隔離といった対策が不在の中で伝染病に対峙した人々が、自らの想像力と土着の信仰を混合する形で自らの身を守る方法を考案してきたのだ。『流行記』の内容は非常に断片的なものである[viii]ため「厄神」などの信仰が誰によって、どのように発生し浸透を遂げてきたものであるかは判然としない。だが少なくとも、ここでいう「神」や「因果」の存在が、不可解な住人の死や病状を理解するための知識として活用されてきた事実は、ある程度汲むことができた。

換言すると、憑依現象が介在しない『流行記』の内容は感染・死といった諸現象に対する、当時の解釈形態の分化を示してくれる素材でもある。上記の流言記録は普段であればあり得ない急速な死の広がりが、「神の居候」や「因果」として、住民たちの直観によって受け止められていたことの証拠なのだ。なおかつ、それは近世において病と深く関わっていた「憑依」の文脈には必ずしも頼らない形で、伝染病をめぐるリアリティが成り立ちえたという可能性を示唆している。

以上、ひとまず昼田の視座・流言研究の視座を援用しつつ、憑依現象を線引きにすることで『流行記』の内容について理解を試みてきた。幾分、場当たり的な分析になってしまった危惧はあるが、その際の共通項なども念頭に置きつつ全体の総括を行なってみたい。

４．結論

本論文ではここまで、『流行記』の内容を検討することによってその特徴と、そこから読み取れる社会的背景を探ってきた。本章では一度、全体の知見を整理する。

まず、狐や狸を媒介にした「憑依現象」としてのコレラ感染である。コレラによる患者の急死、おぞましい脱水症状といった諸現象が、狐やネズミによる憑き物として解釈されてきた。その記録は同時代における、病や死に対する人為的介入の不在という社会的背景を再現していた。拙稿(2020)で一度分析したように、明治期のコレラ流言とは隔離や消毒、医療行為を対象に流布するものであり、その特徴として、人型の犯人像を措定していることがある。加えて、隔離や消毒をめぐって増殖したものに並行して、コレラをめぐる俗説やフォークロア[ix]といった言説も長期にわたり残存するようになっていった。

江戸期と明治期・大正期には多くの文化的差異が存在する一方で、伝染病をめぐっては多くの共通点があった。それは当該時期における文書記録を解読し、その混乱の様子を析出することによってより理解しやすくなるものでもあった。ところが、コレラの罹患や予防、治癒といった諸々の位相は同じ伝染病や等しく未発達な細菌学といった背景を持ちながらも流言の中でそれぞれが独自の世界観を形成していた。前者は狐やネズミの憑依によって罹患を説明し、呪符や祈祷によって自らの身を守ろうとするが、後者は隔離や消毒といった行政措置によって患者の死を説明し、一揆によって自らの身を守ろうと試みる。

流言研究の視座においては、得体の知れない危機や災害においてそれを解釈するために、断片的な知識が必要だ。しかし江戸期においては自治体・コミュニティによる伝染病への介入が極めて希薄であったがゆえに、人型の犯人像を措定することができなかった。憑依現象や疫神をめぐる因果が流言の基軸になっていた事実記録は、彼らが当該時期において持ちえた知識の欠落を暗示してもいる。ここでいう知識とは伝染病の流行やその性質のみによるものではなく、当事者たちが生活する地域やそれを管理する自治体の、流行現象への介入によっても規定されうるだろう。伝染病をめぐる流言蜚語は当該時期における、住民たちの直観、ひいてはリアリティを理解するための大切な資料記録であるが、その内容は語り手・資料の書き手のみによっては全容が規定されない。伝染病に対する社会の介入のあり方が、当事者たちとの協働によって相異なる世界観を作り出すのだ。

ただし、本論文では江戸期におけるコレラ流言に宿っていた世界観やその背景を推察することはできたが、重要な比較対象である明治期・大正期における諸事例については詳しく例示していくことができなかった。それらの検討を別稿に帰す課題とした上で、一旦考察を終えたい。

付記

本研究は日本学術振興会による特別研究員奨励費の助成を受けて行われたものである。（課題番号21J10002：『コレラの流行と流言蜚語』）

参考文献

Deville, P, 2012, peste&cholera:Editions du Seuil, POINTS.

Ginzburg, C, 1976, Le fromage et les vers : l'univers d'un meunier du XVIe siècle Il formaggio e i vermi : il cosmo di un mugnaio del'500.＝2012杉山光信（訳）『チーズとうじ虫　16世紀粉挽屋の世界像』みすず書房.

Keith. A. R&David. Y, RELIGION in Sociological Perspective SEVENTH EDITION, SAGE.

Koter. S. L&Gessler. J. E, 2014, A Worldwide History Cholera,McFarland.

Foucault, M, 1954, Maladie mentale et psychologie, P. U. F., Paris.＝1970神谷美恵子（訳）『精神疾患と心理学』みすず書房.

昼田源四郎，1985，『疫病と狐憑き　近世庶民の医療事情』，みすず書房.

宮前健太郎，2020，「明治初頭における公衆衛生をめぐる啓蒙に関する一考察：小新聞の投書欄に着して」，『社会学ジャーナル』（45），73–86，筑波大学社会学研究室.

Sarah. N, THE SOCIOLOGY OF Health and Illness 4th Edition, polity.

佐藤健二，1995，『流言蜚語　うわさ話を読み解く作法』，有信堂.

Shibutani, T, 1966.Inprovised news : A Sociological Study of Rumor, Bobbs–Merrill.＝1985広井脩・橋本良明・後藤将之（訳）『流言と社会』東京創元社.

篠原進・門脇大・今井秀和・佐々木聡，2021，『安政コロリ流行記　幕末江戸の感染症と流言』，白澤社.

立川昭二，1976，『近世病草紙　江戸時代の病気と医療』，平凡社.

William H.Mcneill,1976,Plagues and Peoples,The English Agency.=2007佐々木昭夫（訳）『疫病と世界史』中公文庫.

---

[i] 侵入経路については「朝鮮渡来説」と「ジャワ渡来説」が主流であるが、現在のところ画一の見解は出ていない。発生場所についてはインドが最も有力である。古来コレラは風土病として特定地域に蔓延するにとどまっていたが、越境移動に伴って感染をアジア、アメリカ、欧州など各地に広げていった。近代化によって感染を広げたことから「近代病」と呼ばれることもある。

[ii] それほど数は多くないが、これまでにも文書記録によって当該時期庶民の生活意識・世界観について記述を試みる研究は行われてきた。例としては Gin-

zburg（1976）による異端審問研究などがあり、そこでの研究対象は「ミクロコスモス」と形容されている。

[iii] 付言すれば、流言に関する既存の社会学研究において「当事者の直観」という要素自体が十分に組み込まれてこなかったという事実も見逃せない。病に対する不安や恐怖を当事者の意味づけに基づいて検討することは、流言研究が試みてきた当事者の体験理解を一層深化させてくれるだろう。それはひいては、彼らが暮らした社会の力能、機制、病に対する危機意識、介入のあり方など実に多くの背景を描写してくれるのだ。

[iv] 二番目に挙げた化け狸の流言の場合、「奇病に便乗して人々を苦しめている」と記述されているため厳密には憑依現象ではない。ただし、異形の怪物に変異して家屋の中に潜むという描写からは、家に住み着く（≒住居に暮らす者にとりつく）という形で人々に害をなしているという性質も読み取れるため引用した。また、コレラの強い感染力を念頭において解釈すれば、「たぶらかす/苦しめる」といった行為に病原菌の伝播が含まれる可能性も十分ある。そうであれば、記録の中に直接描写されていなくても「憑依現象」の例として扱うことは一定の妥当性を持つだろう。

[v] 詳しくは宮前（2020）、佐藤（1995）を参照。

[vi] 『流行記』における神（野狐）たちは遠大な目的や理念を有してはおらず、単に悪ふざけやたぶらかしの文脈で人々に取り憑き、悪行をなす存在として記述されている。あるいは、人に対する恨みとは逆に、疫病から身を守るための方法を授けるために現れるものも存在した。彼らは疫病の原因になりつつも、時にそれから救済される依代として信仰される両義的な存在であったと解釈できよう。

[vii] ただし「病」という対象をめぐっては、先行研究の一つである昼田（1985）が置いている分析上の前提とやや異なる知見を導ける可能性がある。もう一度昼田の研究を参照してみると、彼は憑依現象の主体となる神、動物状の媒介者を大枠で善/悪に分割して善なる神（＝予言のような超常能力の付与）、悪しき神（＝精神病の発症、気狂い）といった理解を提唱していた。だが『流行記』に書き記されている神たちが憑依現象の末に発症させるのはコレラ（急性疾患、感染症）であり、昼田のそれとは帰結が異なっている。これは同時代における、オルタナティブな憑依現象理解の可能性を示唆するものである。

[viii] 例えば桶屋の娘に関する流言事例では明確に患者がコレラであったと記載されているが、疫病神に関する部分では具体的な病名が現れないまま記録が途切れている。

[ix] 明治期から大正期にかけては、「餅を食べればコレラにかからない」といったうわさ話が流布して餅が極端に品薄になるなどの記録が当時の紙面などに残されている。